

第6章

台湾と中国の間の人の移動に関する研究の動向 —『台商研究』と *Border Crossing in Greater China*—

佐藤 幸人

要約：

本稿では台湾と中国の間の人の移動に関する2冊の研究書——『台商研究』と『大中華圏の越境』——をレビューした。レビューをとおして、経済的利益と社会的アイデンティティの相克が台湾と中国の人の移動の研究の中核的な論点であることが明らかになった。同時に、近年進行している条件の変化——台湾と中国の経済的な格差の縮小、台湾における民主主義の定着、台湾アイデンティティの強まり——の人の移動に対する影響や、比較研究をとおした特殊性と普遍性の識別も必要であることも判明した。

キーワード：

台湾と中国、人の移動、越境、台商

はじめに

1987年に親族訪問や墓参りを理由とした台湾から中国への渡航が開放されて以降、多くの台湾人が観光、ビジネス、就業、留学といった種々の目的のために中国に赴いた。『兩岸經濟統計月報』第286期（臺灣經濟研究院2017）によると、2016年6月末までの渡航者は9,047万人に達する。短期の渡航者だけではなく、数年、十数年、二十数年と長期にわたって中国に滞在する台湾人や、中国に永住するつもりでいる台湾人も少なくない。

一方、中国から台湾への渡航は長く制限されていたが、2008年以降、馬英九政権において種々の緩和がおこなわれ、特に観光客は激増した。同じく『兩岸經濟統計月報』第286期によると、2016年末までに台湾を訪れた中国人は2,347万人に達する。このうち2008年以降に台湾を訪れた中国人は2,161万人、そのなかで観光客は1,675万人だった。それぞれ中国から台湾への渡航者の累計の92%と71%に相当する。なお、2016年に蔡英文政権が誕生して以降、台湾を訪れる中国人観光客は激減している。

このように多数の人の移動は多くの研究者の関心を集めることになり、これまでに大量の研究が発表されてきた。本章では多くの論文を収録する『台商研究』（耿曙・舒耕德・林瑞華編2012）と『大中華圏における越境』（Wang ed. 2015）を取り上げて、台湾と中国の間の人の移動に関する研究において、どのような研究課題が取り上げられてきたのか、既存の研究によってどのようなことが明らかになり、どのようなことが解明されずに残されてい

るのかを検討したい。まず第1節と第2節で、『台商研究』と『大中華圏における越境』それぞれの内容を、若干のコメントを加えながら紹介する。次に第3節では、2冊の内容を踏まえて、台湾・中国間の人の移動の研究のこれまでとこれからについて考察する。

第1節 『台商研究』

台湾と中国の間の人々の移動の多くは、本書のタイトルにある「台商」と呼ばれる台湾人の移動であった。それゆえ、「台商」は台湾・中国間の人々の移動の研究の焦点といえる。

では、「台商」とはどういう人たちのことか。「台商」には複数の意味がある(佐藤 2012)。最も狭くは、台湾人の企業家、つまり企業を所有し、かつ経営している人を意味する。より広い意味としては、「台籍幹部」略して「台幹」と呼ばれる、雇われている経営者や中間管理職を含んでいる。本書ではこの2つの意味で台商を用いている。本稿でもそれを踏襲する。実際には、台商には台湾系企業という意味もある。しかし、本書ではその意味では用いられていない。なお、台商は中国以外で活動する台湾人企業家や経営者にも使われるが、本書でいう台商は中国で活動している企業家や経営者に限られる。

『台商研究』はイントロダクションのほか、9つの章から構成されている。9つの章は「台商研究の回顧と展望(台商研究の回顧と展望)」(第1章)、「跨界経験(越境経験)」(第2章と第3章)、「身分認同(アイデンティティ)」(第4章と第5章)、「制度環境」(第6章と第7章)、「労働体制」(第8章と第9章)の5部に分かれている。

本書のイントロダクションにおいて、編者らはこれまでの「台商研究」がマクロ的な分析に偏り、台商自身が研究の主たる対象となつてこなかったことを批判している。マクロ的な現象の背後にある構造とその変化をみるためには、ミクロ的な実証研究をおこなう必要があることを宣言している(p. I)。

耿曙・林瑞華・グンター・シュベルト「台商研究の起源、発展、核心的課題」(耿曙・林瑞華・舒耕德 2012)

耿曙、林瑞華およびグンター・シュベルトは本章において、台商研究の基礎を提示している。まず、第2節において、台商の定義をおこなうとともに、台商研究の特徴が経済的な利益と社会的なアイデンティティの相克の分析にあることを明らかにする。第3節では台商研究の起源として、台湾研究、「兩岸関係」つまり台湾と中国の関係の研究、中国研究の3つがあることを示す。第4節と第5節では、台商研究の意義はグローバリゼーションのもとでの企業の組織的対応と、アイデンティティの変化の解明にあるとしている。最後に台湾研究の課題を提示して本章を締めくくっている。

本章の最も重要な点は、台商研究の中核が経済的なベクトルと社会的なベクトルのせめぎあいにあることを明確に示したことである。実際、本書ばかりでなく、次に紹介する『大中華圏における越境』でもアイデンティティの部が設けられ、それには4つの章が収めら

れている(なお、そのうちの2つの章は主に香港について論じている)。

鄧建邦「柔軟性のもとでの制約—中国の台幹の越境する仕事の流動性と生活の組み立てを理解する—」(鄧建邦 2012)

台幹は狭い意味の台商と同一視されやすく、広い意味の台商に包含されているが、台商との間には雇用者と被雇用者という利害の相反を含んだ関係がある。特に中国のコストが上昇するなか、また中国人従業員の学習が進むことによって、台幹と台商の立場の違いは表面化しやすくなっている。

鄧建邦は本章において、このような背景を踏まえながら、台幹を技能移民としてとらえ、その仕事や生活を分析している。鄧はインタビュー調査をもとに、中国人幹部による台幹の代替は進行しているが、すべてが代替されることはないこと、台幹の地位は中国人従業員との関係において不安定であり、台幹自身リスクを感じていること、仕事の流動性に対して家庭が種々の対応をおこなっていることを描き出している。

鄧が明らかにした台幹の姿は他の外資系企業の海外駐在員と共通するところが多い。台幹は他の海外駐在員と比べて、どのようなユニークな特徴をもっているのか、さらに研究を深める必要がある。

林平「二重の境界人—中国の外省人—」(林平 2012)

外省人とは本来、現在地以外の省籍をもつ人を意味するが、台湾では1945年以降に渡ってきた人とその子孫を意味する。彼らは台湾ではマイノリティであり、現在の中国においても台湾からの移住者なので、林平は本章において「二重の境界人」と呼んだのである。

外省人の多くは1945年以前から台湾に住む人とその子孫である本省人、より正確に言えば福佬系の本省人の多くと異なり、中国に対して強いアイデンティティをもっている。つまり、彼らにとって中国に行くことは故郷に帰ることである。このように彼らは中国に対する強い思いをもっているにもかかわらず、実際には中国には戻らず、台湾にとどまることが多い。自身が外省人である林は自らの経験や感情を内省しつつ、この問題を検討している。

林はインタビュー調査のなかから、2000年代の民進党政権の成立が外省人に対して、台湾での居場所を失ったという、深刻な心理的衝撃を与えたことを描き出している。この点は佐藤(2012)とも一致する。さらに林は2008年の国民党の政権奪還によって外省人の衝撃が完全に除去されてはいないことも明らかにしている。林は同時に、彼らが中国で違和感、嫌悪感をもつことも観察している。この点は上水流(2012)と共鳴する。

台湾では2016年に三度目の政権交代が起こり、民進党が政権に返り咲いた。これは外省人に対してどのようなインパクトを与えたのだろうか。彼らの疎外感を増幅したのだろうか。それともはや強い衝撃を与えることはなくなっているのだろうか。研究の進展が待

ち望まれる。

グンター・シュベルト「中国の台商の政治的思考—フィールドワークの初歩的探求—」(舒耕徳 2012)

台湾と中国との間には政治的な対立が常に存在している。そのなかで台商がどのような政治的役割を果たしているのか、あるいは果たしうるのかは、多くの人の関心を集める問題である。

シュベルトはこの問題に即して、アンケート調査を用いて、台商の政治的な側面に関する次のような理念型を構築した。①台湾の政治には関心があるが、中国の政治に対しては無関心である。公開の場では政治を語ることを避ける。②アイデンティティは状況依存적이다。つまり、状況に応じて使い分けている。③台湾と中国の政治的な関係は不安定であるとみている。しかし、それが自らの事業に影響を与えることは心配していない。④中国の中央の政治には関心がない。自身と地方政府への関心は強い。⑤台湾と中国の経済的統合はよいことだと考えている。⑥台湾と中国の経済的な交流によって政治的な対立は解決しうると考えている。台湾の政府は台商の経験を尊重すべきだと考えているが、自ら政治的な行動をとることは考えていない。⑦台湾人と中国人の文化面、社会面のギャップは依然として大きいとみている。⑧台商協会の政治的な道具としての有用性を、一部の台商は相当低く評価している。⑨台商は精力の大部分を地方官僚および顧客との関係に使っている。

シュベルトが本章のなかで紹介している台商の様々な発言も興味深い。しかし、解釈という点ではさらに掘り下げる余地がある。

曾于秦・曹敏娟・耿曙(2012)「政治社会化のメカニズムとしての東莞台商学校—台湾人学生アイデンティティの源—」(曾于秦・曹敏娟・耿曙 2012)

東莞をはじめ、中国では3カ所に台商の子を通わせるための学校がある。台商学校と呼ばれている。台湾に近い教育の機会を提供することを目的としている。直接的に政治に関わるようなことは排除されている。

曾于秦、曹敏娟および耿曙は、このような台商学校において、どのようなアイデンティティが形成されるのかを論じている。既に先行研究でも示されているが(例えば陳鏗任・吳建華 2006)、曾らは東莞の台商学校は現地社会から相当程度隔離されていて、それが学生の台湾人アイデンティティの形成を促していることを明らかにしている。論証のために直接提示されている発言が面白く、有効である。

東莞以外の2校は長江デルタにある。長江デルタでは台商と現地社会の距離が東莞よりも近い。そこでも東莞の台商学校と同じことが起きているのかどうか、興味をもたれる。

林瑞華・耿曙「中国大陆の自発的団体と市民社会—昆山と東莞の台湾人協会のケーススタディー」(林瑞華・耿曙 2012)

中国各地では、そこに進出している台商が台商協会と呼ばれる団体をつくっている。林瑞華と耿曙が設定した本章の目的は、中国大陆の現行の制約のもとで台商協会は強力な組織に発展しているかどうかを明らかにすることである(p. 190)。林と耿は結論として、強力な国家と発達した社会ネットワークのはざま、台商協会はメリットを会員に限定することができず、台商を勧誘したり、動員したりすることができずにいるとしている(p. 192)。

林と耿は綿密な分析をおこない、結論は強い説得力をもっている。彼らが明らかにした台商協会の限界は、中国というファクター以上に台商の行動によってもたらされているように見える。そうであるならば、中国以外の台商協会においても同様の問題が発生していると考えられるが、実際はどうか。また、台商協会のなかでも東莞の台商協会は自律性が高く、活動も活発であるといわれている。東莞の台商協会と他とはどのような違いがあったのか。このような比較研究をとおして、本章の結論をさらに深めていくことが必要だろう。

李駿怡「台商と中国の地方政府の間のインタラクション—依存と自律の間の振り子運動—」(李駿怡 2012)

中国においてビジネスをおこなうとき、地方政府と良好な関係をつくれるかどうかは非常に重要である。李駿怡はこの問題について、天津、昆山、東莞の3つの都市を事例に、1987年から2009年までを4つの時期に分けて検討している。李は結論として次の2つの発見を提示する。①中国の中央および地方政府にとっての台商の価値は、台湾と中国の関係および台湾の民主政治の動向によって変化する。②中国の地方政府にとっての台商の価値は経済面が大きい。

李は2008年に地方政府が台商に対して不利な態度をとるようになったのは、台湾で国民党が政権に復帰し、台商の政治的な価値が下がったからだと説明している。しかし、果たしてそうなのだろうか。台商の経済的な価値の低下によっても説明できるのではないだろうか。

このような疑問が湧くのは、李が台商の政治的価値や経済的価値が決まる仕組みを十分に提示していないためである。換言すれば、それぞれの価値を数値化することは不可能としても、政治的価値と経済的価値の大小を判別する何らかの方法が必要なのだと考えられる。

劉玉照・王平・應可為「中国の台湾系企業の内部における組織の『断裂』と『台湾人』集団の社会的融合」(劉玉照・王平・應可為 2012)

ここまで取り上げた論稿の幾つかでも示唆されていたように、台商の中国社会への融合

は進んでいない。台湾人が中国人と同文同種であることを強調するならば、融合が進まないことは奇異にもみえる。劉玉照、王平および應可為は本章において、この問題に挑んだ。繰り返し論じられてきた問題を扱っているにもかかわらず、本章は中国側の視点から書かれているため新鮮に感じられる。

劉らは融合が進まない原因を、台湾系企業内部の「断裂」に求める。断裂は配置、昇進とローテーション、管理体制、報酬においてみられ、さらに空間的な隔離までである。しかし、劉らの議論に対しては、台湾系企業の台湾人と中国人の関係がどこまで異常なのかという疑問を覚える。劉らは同文同種なのだから融合して当然という前提を暗黙に置いているようにもみえる。もし同文同種という条件を外し、例えば中国にある他の外資系企業と比べた場合、台湾系企業の状況はどこまで特殊といえるのだろうか。他の外資系企業では台湾系企業以上に融合が進んでいるのだろうか。本章はこのような観点から再検討される必要があるだろう。

林家煌・林芷榕・耿曙「世界はフラットか—グローバル化—、ローカリゼーションと中国の台湾系企業における台湾人幹部と中国人幹部の関係—」(林家煌・林芷榕・耿曙 2012)

本章は前章と同様、台湾系企業の内部組織を論じている。本章の方が前章よりも問題意識は明確である。林家煌、林芷榕および耿曙は本章において、グローバル資本主義と華人文化の特質が企業の内部にどのように作用しているのかを観察するとしている(p. 302)。

しかしながら、グローバル資本主義とは何を指すのか、それは具体的にどのような経路をたどって企業の内部組織に作用するのかは不明瞭である。一方、華人文化による説明も、そこで取り上げている特質がどこまで台湾系および華人系に特有のものであるかが先に示される必要があるだろう。本章の視点は興味深いが、実証分析は改善の余地を少なからず残している。

第2節 『大中華圏における越境』

まず本書のタイトルにある「大中華圏」とは中国、台湾、香港、マカオのことである。したがって、境界はこの4ヵ所の間にそれぞれ存在しているが、本書ではマカオにはまったく言及せず、また、台湾と香港の境界も議論されていない。論じられているのは中国と台湾、中国と香港の間の境界とそれを越境する現象である。

本書はイントロダクションを含む14の章から構成されている。イントロダクション以外の13章は、生産(第2章から第6章)、コミュニティ(第7章から第10章)、アイデンティティ(第11章から第14章)の3部に分かれている。本書においても、『台商研究』同様、経済活動にともなう人の移動が主として論じられている。ただし、本書には建築や内装といった業種および職種について論じた章も含まれている。また、本書の重点も台湾と中国の間

の人の移動にあるが、それに加えて台湾系、日系、韓国系の中国子会社の駐在員の比較をおこなった章と、主として香港を中心に議論している3つの章が収められていることも、特徴である。

分析のアプローチも、『台商研究』同様、ミクロ分析が中心になっている。大部分は事例研究であるが、一部の章ではアンケート調査によって収集したデータの統計的な分析もおこなっている。

王振寰「イントロダクションー大中華圏における越境への多元的な視角ー」(Wang 2015)

本書の編者である王振寰はイントロダクションにおいて、本書の目的が大中華圏の内部における境界の変化の過程を分析することであることを明らかにしている。本書がこのような課題に取り組む上で、王の問題意識は明確である。すなわち、社会的な交流の増大と境界の希薄化が人々のアイデンティティの収斂をもたらすかどうか、本書の中核的な問いである(p. 1)。

王は本書を、グローバリゼーションと境界、アイデンティティに関する研究のなかに位置づける。続いて、台湾と中国の経済的な関係の接近を、貿易や直接投資の動向と、本書の各章の議論から示す。さらに、本書の各章の議論を総括して、台湾では増加する社会的交流がアイデンティティの収斂をもたらしていないこと、むしろアイデンティティの分化を促していること、香港においても台湾と同様の傾向がみられることを明らかにし、上述の問いに対して否定的な見方を提示している(p. 14)。

王振寰・曾聖文「越境するイノベーション・ネットワークを経営するー台湾 IC 設計産業ー」(Wang and Tseng 2015)

今日、生産活動ばかりでなく、研究開発もまた国際化が進行している。こうして形成された国際的な研究開発体制は「グローバル・イノベーション・ネットワーク(Global Innovation Network, 略してGIN)」と呼ばれる。王振寰と曾聖文が本章において設定した問題は、台湾企業のように国際価値連鎖のなかで、主導的な中心とそれに完全に従属する周縁の中間にいる企業が、新たに発達してきたGINにどのように対処するのか、一方ではどのように中心からの要求に応えつつ、他方ではGINのなかでどのように自らの高度化と利益の獲得を達成しているのかである(p. 25)。事例としてIC設計産業を取り上げている。

王と曾は台湾企業が係わるGINを次の3タイプに分け、それぞれにおける台湾と中国の分業関係を分析している。Aタイプは世界的なブランド企業が主導するネットワークであり、台湾の設計会社の中国子会社がそれに参与している。Bタイプは台湾のファウンドリ¹が主導し、その子会社が中国の設計会社などと連携している。Cタイプは台湾の設計

¹ ファウンドリとは、半導体の加工のみを受託するビジネスモデルのことである。自らは設計をおこなわず、ブランドももたない。台湾ではTSMC(Taiwan Semiconductor Manufacturing Co., Ltd.)

会社が主導し、中国の設計会社などを包含している。王と曾は結論として、GINにおける台湾企業の中国企業に対する優位は維持されているとしている。

王と曾はGINをアプローチとして用いているが、Aタイプを除けば、台湾と中国を超えた広がりをもたない。BタイプやCタイプがGINのなかで、すなわち言葉どおりグローバルなネットワークのなかで、どのように位置づけられるのかが課題として残されている。

鄭志鵬「埋め込まれた信頼とその先—製靴産業における台商の組織的なネットワークの転換—」(Cheng 2015)

既に述べられてきたように、台商は特に東莞をはじめとする珠江デルタにおいて、地場経済からは隔絶された飛び地的なネットワークを構築してきた。本章が取り上げる製靴産業はそのような産業の典型である。鄭志鵬は本章において、このような飛び地的ネットワークがなぜ、またどのように解体を始めたのか、飛び地経済の解体は地場経済に何をもたらしたのかという問題を設定し(p. 41)、分析している。

鄭は中国のコストの上昇を、飛び地的ネットワークの解体の原因としている。特に2008年に施行された労働契約法の影響を重視している。しかしながら、鄭は同時に、台商の少なからずが、よりコストの低い場所に移動するという選択肢もあったにもかかわらず、中国の元の場所にとどまっていることを指摘し、その理由として中国で構築したサプライチェーンを他で再現することが困難であることをあげている。鄭によれば、台商は中国にとどまると同時に、中国の地場企業に外注したり、社外工として取り込んだりすることによって、コストダウンを図るという選択をした。

鄭の発見は、謝国雄(Shieh 1992)が描いた1970年代から80年代にかけての台湾における中小企業の発展とオーバーラップするところが多く、たいへん興味深い(佐藤1996も参照)。当時の中小企業の発展の背景には台湾のコストの上昇があり、また謝は1984年の労働基本法の施行の影響を指摘している。

一方、鄭は本章において、タイトルにあるように信頼を分析の中核概念として用いている。しかし、結論において鄭が台商間の信頼は状況依存的なものであったとしているように(p. 56)、信頼は独立変数というよりも、従属変数になっていて、分析全体のなかではリダンダントになっている。

簡旭伸「台湾人建築家とポスト毛時代の中国の建造環境生産」(Chien 2015)

簡旭伸は本章の冒頭で、台湾人が中国の空間の転換に「直接的に」係わってきたかどうかについては、これまでほとんど論じられてこなかったことを指摘する(p. 61)。その上で簡は本章において次の課題に取り組むことを明らかにする。①国際的な評価が高いとはい

中国語名は台湾積体電路製造股份有限公司)をはじめとするファウンドリ専門メーカーが発達している。

えない台湾人建築家が、なぜ、あるいはどのように中国で機会を見つけることができたのか。②台湾人建築家はなぜ、あるいはどのように、中国の様々な建築案件に参加できたのか。③外資に対して規制の多い産業で、どのような台湾人建築家が、どのような認可を受けることができたのか。簡が用いるのは政治経済学アプローチである。

簡は台湾人建築家が次の4つの戦略を用いたことを示した。第1の戦略は高名な李祖原が用いた、中国の伝統的な文化の導入である。第2は台湾系企業を顧客とすることである。第3は病院のような機能が複雑な建築物の設計を引き受けることである。第4はコミュニティに合わせた建築という考え方を中国に持ち込み、実行することである。

簡の分析は、製造業や一部のサービス業以外の分野に、台湾人がどのように参入したのかを明らかにしたという点で有意義である。一方、本章のはじめに掲げた、台湾人が中国の空間の転換にどのように係わってきたのかという問題に対する回答としては、簡の分析の結果はやや物足りない。それは恐らく台湾人と台湾人以外の設計の間には、どのような違いがあるのかは分析の射程外に置かれているためだと考えられる。

園田茂人「中国市場における『関係』の構築—日系、韓国系、台湾系企業の駐在員の比較分析—」(Sonoda 2015)

「関係(guanxi)」は華人社会の人と人の関係の特徴を示す重要な概念である。中国でのビジネスにおいても、「関係」が重要といわれ、欧米系の企業と比べて、華人系の香港系や台湾系企業はそれを活用していることが明らかになっている。では、文化的に近い、同じ東アジアに本社をもつ日系企業や韓国系企業ではどうだろうかという問題意識を、園田茂人は本章において提示した(p. 78)。

園田はこの問題意識に基づいて、次のような4つの仮説を用意し、アンケート調査を使って統計的に検証した。①台湾人駐在員は韓国人、日本人駐在員よりも地方官僚の友人が多い。②中国語をより流暢に用いる駐在員は、地方官僚の友人が多い。③駐在期間がより長い駐在員は、地方官僚の友人が多い。④江蘇省よりも広東省の子会社の駐在員の方が、地方官僚の友人が多い。検証の結果、駐在期間の影響は有意に強く、中国語の能力や子会社の立地は顕著な影響がなかった。

検証結果のなかで興味深かったのは、予想に反して韓国人駐在員の方が台湾人駐在員よりも多くの地方官僚の友人をもっていたことである。園田の解釈は、台湾人従業員は地方官僚以外にも資源を調達するチャネルがあるからではないかというものだが物足りない。他のチャネルとは何か、いっそうの掘り下げが必要であろう。

張家銘・鄭得興「『成長』と『従属』に対する地方社会の反応—中国蘇州の台湾人ビジネスマンの事例研究—」(Chang and Cheng 2015)

本章は他章と比べて、完成度の低さが目立つ。なかでも107ページの1行目から下から

7行目までの3段落は、同じ107ページの下から6行目から108ページの33行目までの3段落と完全に重複している。

ここでは、張家銘と鄭得興が次のような問題を設定していたことを述べるにとどめたい。
①台湾企業の投資が蘇州にどのような経済的および社会的な効果をもたらしたのか。②現地の人々はその効果に対してどのような態度をとったのか。③蘇州の人々の台湾人に対する包摂の状況はどのようなものであったのか(p. 91)。

林平「ライフスタイル移民—中国の台湾人女性—」(Lin Ping 2015)

移民は多種多様なタイプがあり、近年、先進国に住み、一定の資源をもつ人が、社会的な上昇などを求めて途上国に移住するという「ライフスタイル移民」が注目されている。林平は本章において、中国に移住した台湾人女性をライフスタイル移民の一種としてとらえ、彼女たちがなぜ中国に来たのか、実際の中国での生活をどのように感じているのか、特に独身女性の場合、中国人男性とどのように交流しているのかを分析している。

林は事例を掘り下げて、若い女性の場合、台商と何らかの血縁関係があって、その秘書やアシスタントになっていることを発見している(p. 124)。林はまた、彼女たちの境遇を、社会的な上昇を求めて中国に移り、それを実現したものの、それゆえに現地の人々との間にはギャップが生まれ、寂しい思いをしているという、パラドックスとして総括している(p. 128)。ギャップは所得の違いに加えて、それによってもたらされた生活習慣の違いからも生じている。

中国経済は減速しながらも成長を続け、一方では台湾経済は低成長から脱することができずにいる。したがって、台湾と中国の経済的なギャップは縮小している。そのとき、上述のような台湾からのライフスタイル移民はどうなるのか。林も末尾で指摘しているように、さらなる研究が必要だろう。

鄧建邦「周縁的な移動—台湾系製造業企業の中国内陸部への移動—」(Deng 2015)

2000年代に入って、先行して経済が発展した中国沿海部は賃金等のコストの上昇が著しく、一部の台湾系企業はコストの低い内陸部へ移動するようになった。鄧建邦は本章において、この移動の過程やそこでの経験を論じている。特に職場における内陸部で新しく採用した従業員、沿海部から移動した熟練労働者、台湾人幹部の間の社会的関係に着目している(p. 136)。

鄧はまず、内陸部で採用した労働者に対する台湾人幹部の戸惑いを描いている。鄧はその理由として、沿海部では内陸部から移動した、つまり元の生活から切り離された労働者を使っていたので統制が容易だったのに対し、内陸部の労働者は近隣に住み、既に一定の生活のパターンをもち、それを企業での就労よりも優先することを指摘している。また、鄧は沿海部から移動した熟練労働者が、元々内陸部出身のためか、移動を機会として積極

的にとらえているのに対し、台湾人幹部が台湾や沿海部でのオペレーションを懐かしむ傾向があることを明らかにしている。

鄧は台湾系企業の中国内陸部への移動を、移民研究の観点から「周縁的」としているが、企業経営の観点からみれば、低コストの生産拠点へのシフトはこれまで世界中で幾度となく繰り返されてきた。その点からすれば、鄧の発見に目新しさはなく、ノーマルな現象である。むしろ鄧が観察した内陸部の工場の状況から浮かび上がるのは、移動した労働力に依存してきたこれまでの沿海部の工場の異様さである。

沈秀華「台湾海峡を跨いだ夜の経済交流—中国のカラオケバーでの快楽、仕事、カー」(Shen 2015)

台商の大部分は男性であり、かつ既婚者でも中国には単身赴任することが多かった。特に初期は中国の生活環境の整備が遅れていたため、家族を帯同することが難しかった。その結果、台商の娯楽としてホステスが接待するカラオケバーと彼女たちの売春が発達し、さらにそこで知り合ったホステスを台商が現地妻とするケースが多数発生した。本章はその実態にアプローチしている。

沈秀華は本章の課題を、台商が顧客となり、また生産者となっている、中国のカラオケでの女性の接待と商品化された性の儀式化と制度化を解明することだとしている(p. 149)。具体的な問題として、性の商品化がどこで、どのように、なぜおこなわれるのか、それはどのように組織化されているのか、主な行為主体の社会的なバックグラウンドはどのようなものか、どのような社会的環境のなかで行為主体は出会うのか、どのような社会的な関係と結果がこの過程で生まれるのかなどを設定している(p. 151)。

沈の研究成果は詳細な事実の発見にあるので、ここで短く要約することは難しい。幾つかの発見を切り取るならば、例えば、外省人を含めて、台商はカラオケバーにおいて、中国語とともに台湾語を主要言語として使っている (p. 155)。また、北方や四川省出身の女性は、肌のきめの細かさから、台商に好まれる(p. 158)。沈は金銭のやり取りも細かく記述している。例えば1回の売春は1,000 人民元である(p. 160)。すべての台商がカラオケバーでのホステスの接客を好んでいるわけではないが、強い同調圧力がある(p. 166)。買春は通常、ホテルなどではなく、台商自身の宿舎か、他の台商の宿舎でおこなわれる(p. 167)。

沈は近年、台商のカラオケバーの利用が減少していることも指摘している(p/ 161)。前述のように、経済的な環境が変わるなか、カラオケバーとそこを舞台に展開される性の商品化がどのように変わっていくのか、継続的な研究が望まれる。

肖索未「階級、ジェンダーとグローバル化された親密性—大中華圏における『妾』—」(Xiao 2015)

本章も前章と同じく性の商品化を取り上げている。特に台湾人や香港人の中国人の「妾」

²に焦点を当てている。肖索未は本章において、グローバルな文脈のなかでおこなわれる親密な関係と性行為をとおして、階級的なアイデンティティや意識が形成されること、および中国人女性がこのような関係をもつにいたる様々な過程を論じている。また、議論において彼女たちを受動的な行為主体とはみないことを強調している(pp. 174-175)。

本章もまた詳細な事実の発見に価値がある。前半では香港人のビジネス・エリートの方を論じている。彼女たちの金銭のために自らの意思に反して拘束を受け入れる姿の描写は生々しい。しかし、それ以上に秀逸なのは、後半のトラックの運転手など、香港の中下層の労働者とその妻たちの交流である。お互いにそれぞれの社会で不遇なものの同士のいたわりあいはロマンチックですらある。これもまた、グローバリゼーションの過程の一瞬の光景なのだろうか。

曾熾芬「アイデンティティはどのように重要かー中国における台湾人クリエイター」

(Tseng 2015)

まず本章のタイトルだが、原文の *cultural workers* をクリエイターと訳した。具体的には内装や景観のデザイナーが事例として取り上げられている。曾熾芬はその分析をとおして技能をもつ移住者がアイデンティティとは無関係であるという通説を打破することが本章の目的であるとしている。曾はそのための概念として、職業的なアイデンティティと、生まれ育った環境に由来するオリジン・アイデンティティという、2つのアイデンティティを用意する(p. 190)。曾としては、デザイナーたちの創作にとってオリジン・アイデンティティが重要であることを示したいのである。

曾は事例分析をとおして、台湾人デザイナーのオリジン・アイデンティティの使い方が2種類あることを明らかにする。1つは台湾出身であることを活用することである。もう1つはアイデンティティを中国大に拡大することである。曾によれば、台湾人デザイナーがそのオリジン・アイデンティティゆえに最も評価されるのは、彼らが中国の大企業から発注された場合である。

曾はまた、一部の台湾人デザイナーには、そのオリジン・アイデンティティの優位性が近い将来失われるのではないかという懸念があることも明らかにしている(p. 199)。曾が述べているように、継続的な研究が必要であろう。

林瑞華・耿曙・胡偉星「階級とアイデンティティ、どちらが重要かー中国に滞在する台湾人の社会的同化」(Lin, Keng and Hu 2015)

林瑞華、耿曙および胡偉星は本章の課題を、中国に在住する台湾人がどの程度、現地の

² 原文では *second wife*。

社会に溶け込んでいるのか、すなわちどの程度、自身をその地の住人だと考えているのか、そして自身を現地の人々の一員だと考えているのかを明らかにすることだとしている(pp. 202-203)。

林らはこの課題に取り組むため、アンケート調査とその統計的な分析をおこなっている。彼らは3つの具体的な従属変数を設定した。第1に子をどの学校に就学させているのか、第2に日常においてどのような人たちと付き合っているのか、第3に引退後、どこに住むことを考えているのかである。どのような質問によって、台商のアイデンティティを測定するのかは、台商研究の重要な課題の1つである。林らの第3の質問は、これまでも陳朝政(2005)や佐藤(2012)が用いている。独立変数には階級を表す居住地の地価の評価と、自らを台湾人と思うか、中国人と思うかといった主観的なアイデンティティを用いている。

林らの分析結果は明解である。第1に階級が高いほど、子を中国の地場の学校に通わせている。第2に主観的な中国人アイデンティティが強いほど、また製造業よりもサービス業の方が中国人との付き合いが多い。第3に中国人アイデンティティが強い人、外省人、中国に長く滞在する人は、引退後、中国に住むことを選ぶ傾向が強い。第2と第3の結果はわかりやすい。第1の結論は一見すると予想に反しているように見えるが、林らは高い階級の台湾人は高い階級の中国人と付き合っているからだと説明している。

林らは統計分析を、インタビューによって補足している。それは有効であるとともに、インタビュー自体が興味深い。

鍾庭耀・戴捷輝「香港の人々のエスニック・アイデンティティ—政治化された学術的な問題—」(Chung and Tai 2015)

本章はタイトルのとおり、香港の人々のアイデンティティの変遷を論じている。鍾庭耀と戴捷輝が本章の冒頭で述べているように(p. 219)、研究者は香港の中国への返還後、香港人アイデンティティは衰退すると予想していた。しかしながら、鍾と戴が本章で示すように、2008年に傾向は反転し、香港人アイデンティティはむしろ強まっている。

台湾におけるアイデンティティ研究からみた場合、本章の興味深いところは香港におけるアイデンティティの測定方法の模索である。台湾と同様、香港のアンケート調査でも、多くの場合、「香港人でもあり、中国人でもある」という選択肢が用意されているが、鍾と戴はその意味を考察している。筆者の知るかぎり、台湾では「台湾人でもあり、中国人でもある」という回答の意味を掘り下げることが少ない。また、鍾と戴の調査ではアイデンティティの強さも調べている。これも筆者の知るかぎり、台湾でみることは少ない。

鍾と戴は本章の後半で、彼らの学術的な研究が政治化した過程を明らかにしている。そこから近年の香港の状況や、中国に関連した研究が向き合わなければならない困難が鮮明に浮かび上がる。

陳欣欣「香港と離散した中国」(Chin 2015)

本章も香港について論じている。陳欣欣は返還が決まった1980年代以降、香港の人びとの言説のなかで「中国」がどのように言い表されてきたのかを分析することを、本章の課題として設定している(p. 241)。

陳はまず香港の歴史教科書を分析し、中国史と世界史に分かれていたこと、前者では香港は周縁的にしか扱われてこなかったこと、後者では植民地下の香港の発展が強調されていることを明らかにしている。陳はこのような矛盾から、歴史教育をつうじた中国人としてのナショナル・アイデンティティの形成はうまくいっていないとしている(p. 246)。

続いて香港における自治を求める運動を取り上げ、さらに陳は「中国」をどのようにとらえるのか、ひいては香港と「中国」の関係をどのように考えるのかという議論に踏み込む。かつて李登輝が司馬遼太郎との対談で述べたように、華人社会にとって「中国」は複合的な意味をもつ、厄介な概念である(司馬 1994)。陳はそこで、自治の追求や、華人社会間の対等な関係を想定する華語(sinophone)という考え方の、返還後香港における実効性を否定し、ディアスポラを使って華人社会の現状を理解することの有用性を再提起する。しかし、陳自身が紹介しているように、華人社会にディアスポラを適用することは中国の中心性を想定しているという批判がある。それゆえ、現状においては、台湾はもちろん、香港でも受け入れられないのではなかろうか。

第3節 考察

最後に、本稿でおこなった『台商研究』と『大中華圏における越境』のレビューを踏まえて、その特質は何か、特質はどのように生まれたのか、考察してみたい。また今後の研究の向かうべき方向は何かについても検討してみたい。

耿曙、林瑞華およびグンター・シュベルトは、台商研究の核心は経済的利益と社会的アイデンティティのせめぎあいだと述べた。実際、ここで取り上げた台湾と中国の間の人の移動に関する2冊の学術書に収められた20あまりの論文のうち、その多くがこの2つの要素のどちらか1つか、その両方を論点に含んでいる。経済的利益と社会的アイデンティティが、台湾と中国の間の人の移動に関する研究が他の移民研究に対しても特徴的な論点であることが改めて確認することができた。

経済的利益と社会的アイデンティティが中核的な論点となるのは、台湾と中国の間の人の移動が、両者の政治的な対立あるいは矛盾のもとで、そしてそれにもかかわらず、活発におこなわれているからである。その結果、経済的利益の増加→人の移動の増加→アイデンティティの変化→台湾と中国の政治的関係および台湾の前途の変化というダイナミズムが成り立つのかどうかという、関心が生まれる。それが研究を動機づけ、課題の設定にも影響を及ぼしているのである。それゆえ、台湾と中国の政治的な対立あるいは矛盾が変わらないかぎり、このような関心とそれに基づく研究の特徴は持続すると考えられる。

一方、変化もある。最も顕著に進行しているのは、台湾と中国の経済的な格差の縮小である。これまで台湾および台湾人は中国と中国人に対して経済的な優位性をもち、そのことが種々の社会現象を生み出してきたことが、ここで取り上げた諸研究によっても明らかになっている。この条件が変わったとき、今まで観察してきたような現象にはどのような変化が起きるのか。このような問題意識は新しい研究の流れをつくるかもしれない。

もう1つの重要な変化は台湾の政治と社会において生じている。政治的には民主主義が定着し、3度の政権交代がおこなわれた。社会的には台湾アイデンティティが強まっている。特に「天然独」と呼ばれる若い世代の台湾アイデンティティは質的にも新しい。このような変化が台湾と中国の人の移動に影響を与える可能性も注目される。

また、『台商研究』と『大中華圏における越境』のレビューをとおして、これまでの台湾と中国の人の移動に関する研究、特に台商研究において、比較が依然として不足していることも明らかになった。その結果、研究している事象がどこまで特異なものなのか、それとも一般的にみられることなのか、明瞭に識別できていないのである。東莞と昆山、珠江デルタと長江デルタ、中国における台湾系、香港系企業と他の外資系企業、台湾系企業の中国での活動と東南アジアでの活動、これらの比較は本稿で取り上げた2冊のなかでもおこなわれているが、なお不十分である。さらなる研究が必要だろう。

参考文献

【日本語】

上水流久彦(2012)「台湾の本土化後にみる外省人意識」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』アジア経済研究所。

佐藤幸人(1996)「台湾の経済発展における政府と民間企業—産業の選択と成果—」服部民夫・佐藤幸人編『韓国・台湾の発展メカニズム』アジア経済研究所。

佐藤幸人(2012)「台湾系企業および台湾人企業家・経営幹部からみた台湾と中国の関係」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』アジア経済研究所。

司馬遼太郎(1994)『街道をゆく 第40巻 台湾紀行』朝日新聞出版。

【中国語】(ピンイン順)

陳朝政(2005)「台商在兩岸的流動與認同：經驗研究與政策分析」東吳大學政治學研究所博士論文。

陳鏗任・吳建華(2006)「是故鄉，還是異鄉？：從東莞台校學生的學習經驗看台商子女的身份認同意象」『師大學報 教育類』第51卷第2期。

鄧建邦(2012)「彈性下的限制：理解中國台幹的跨界工作流動與生活安排」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

川上・松本編「馬英九政權期の中台関係と台湾の政治経済変動」調査研究報告書 アジア経済研究所 2017 年。

耿曙・林瑞華・舒耕德(2012)「台商研究的起源、發展與核心議題」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)『台商研究』台北 五南圖書出版。

李駿怡(2012)「台商與中國地方政府的互動：在依賴與自治間擺盪」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

林家煌・林芷榕・耿曙(2012)「世界是平的？：全球化、在地化與大陸台資企業台、陸幹關係」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

林平(2012)「雙重邊緣人：在中國大陸的外省台灣人」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

林瑞華・耿曙(2012)「中國大陸的自發協會與公民社會：昆山與東莞台協的個案研究」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

劉玉照・王平・應可為(2012)「大陸台企中的組織『斷裂』與『台灣人』群體的社會融合」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

舒耕德(2012)「大陸台商的政治思惟：田野初探」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

臺灣經濟研究院(各月版)『兩岸經濟統計月報』台北 行政院大陸委員會 (<http://www.mac.gov.tw/ct.asp?xItem=116465&ctNode=5720&mp=1>)。

曾于蓁・曹敏娟・耿曙(2012)「作為政治社會化機制的東莞台校：台生身分認同來源」耿曙・舒耕德・林瑞華編(2012)。

【英語】

Chang, Chia-ming and Ter-hsing Cheng (2015) “Local Response of ‘Growth’ and ‘Dependency’: A Case Study of Taiwan Businessmen in Suzhou, China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Cheng, Chih-peng (2015) “Embedded Trust and Beyond: The Organizational Network Transformation of Taishang’s Shoe Industry in China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Chien, Shih-Shen (2015) “Taiwanese Architects and Post-Mao China’s Production of the Built Environment.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Chin, Angelina (2015) “Hong Kong and Diasporic China” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Chung, Robert and Edward Tai (2015) “Ethnic Identity of Hong Kong People: An Academic Question Turned Political.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Deng, Jian-bang (2015) “Marginal Mobilities: Taiwanese Manufacturing Companies’ Migration to Inner China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Lin, Ping (2015) “Lifestyle Migrants: Taiwanese Women in China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Lin, Ruihua, Shu Keng and Richard Weixing Hu (2015) “Class or Identity Matters?: The Social Assimilation of Taiwanese Sojourners in China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

Shen Hsiu-hua (2015) “Cross-Strait Economic Exchanges by Night: Pleasure, Work, and Power in Chinese Karaoke Hostess Bars.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).

川上・松本編「馬英九政権期の中台関係と台湾の政治経済変動」調査研究報告書 アジア経済研究所 2017 年。

- Shieh, G. S. (1992) “Boss” Island: *The Subcontracting Network and Micro-Entrepreneurship in Taiwan’s Development*. New York: Peter Lang Publishing.
- Sonoda, Shigeto (2015) “Establishing *Guanxi* in the Chinese Market: Comparative Analysis of Japanese, Korean, and Taiwanese Expatriates in mainland China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).
- Tseng, Yen-Fen (2015) “How do Identities Matter?: Taiwanese Cultural Workers in China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).
- Wang, Jenn-hwan (2015) “Introduction: Crossing borders in Greater China – a Multidimensional Perspective.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).
- Wang, Jenn-hwan ed. (2015) *Border Crossing in Greater China: Production, Community and Identity*. London and New York: Routledge.
- Wang, Jenn-hwan and Sheng-wen Tseng (2015) “Managing Cross-border Innovation Networks: Taiwan’s IC Design Industry.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).
- Xiao Suowei (2012) “Class, Gender and Globalized Intimacy: The Second-wife Phenomenon in Greater China.” in Jenn-hwan Wang ed. (2015).